

# 大野文泉筆 「南部下北半島真景図」「津軽外ヶ浜真景図」について －平成26・27年度購入資料－

本田 伸<sup>1)</sup>・竹村俊哉<sup>2)</sup>

Report on Two Landscape paintings of Edo Era by Ohno Bunsen

Shin HONDA and Toshiya TAKEMURA

Key Words：大野文泉、巨野泉祐、真景図、集古十種、婦登古路日記、下北半島、津軽半島

## 1. はじめに

青森県立郷土館の資料購入事業は平成6年度に始まった。これにより、県外流出の可能性がある資料、もしくはすでに流出してしまった資料の相当数が当館所蔵となり、公開展示や調査研究に活用されている。とは言え、候補資料の所在情報は定期的・定量的に入手できる性質のものではなく、日々の博物館活動の中で偶然にその機会を得られることも多い。

平成26～27年度の購入資料「南部下北半島真景図」（受入番号2340）及び「津軽外ヶ浜真景図」（受入番号2367）はまさしく、その一例である。当館が平成24年に開催した「青森県立郷土館所蔵絵図セレクト展」に来場した所蔵者から、「古書店目録に本資料の情報を掲載した」と知らされたのがきっかけとなって、資料調査に及んだ。その後、本資料が青森県の歴史・民俗研究上重要な意味を持つものであると判り、「地元のもの地元へ置いた方が良い」と理解を示して頂いたことで、当館で購入する運びとなった。

### 南部下北半島真景図

1	野辺地を過て入海をのぞむ
2	田名部駅橋上の望
3	鶴谷のほとり間道
4	鶴谷浜の望
5	下風呂温泉
6	異国間より蛇浦に至るの道
7	同所願望
8	南部北郡 蛇浦の望
9	蛇浦のほとり 切通の望 切通 文化四年ひらくといふ
10	蛇浦を出て一里許して海上を望
11	蛇浦辺北望
12	大間辺
13	大間辺 コウタといふ坂より海上を望
14	材木村の東望
15	材木村
16	原田村を望の図

## 2. 「南部下北半島真景図」「津軽外ヶ浜真景図」について

本資料は、卷子本（2巻）で、いずれも「開巻清音」の題箋が付されている。しかし、この題箋だけでは内容は判然としないので、当館では、上記の表題を登録名とした。

本資料は、江戸時代中・後期に流行した真景図の一つである。真景図は、水墨画に見られるような理想的・観念的な風景描写を離れて実在の景色を描くものであり、当然ながら、画者自身の興味関心と旅行体験が盛り込まれる。本資料に描かれた下北半島・津軽半島の地勢・道付・建物は、制作者と目される大野文泉が当地を訪れた文化4年（1807）頃の状況を示していると考えられ、中央から遠い辺縁と見なされていた当地の人や生活を知る上で、高い記録性を帯びている。

各巻とも、16図を収載している（計32図）。各図のタテ幅は26cmで統一されているものの、ヨコ幅には長短がある（38cmのものが最も多い）。どのような場面が描かれているかについては後掲の図版を参照いただきたい。なお、各図の書き入れについては、右表に摘記しておいた。

### 津軽外ヶ浜真景図

1	外浜鬼泊石門 舍利浜より今別に望むの道
2	今別の東鬼泊より眺望
3	今別南入口よりかえりに見る図
4	今別の西北より三厩を望
5	三厩観音花表のあたりより見る 三厩駅の辺大石三洞 判官繫馬のところと云
6	三よし越 左右絶壁溪泉を道とす
7	三吉越東望 三厩より小泊江至る
8	三吉越西一里許 湖水辺に至り西海を望
9	三吉越西おり口より竜飛崎を望
10	三吉越を過六七丁にして海を望
11	三吉越より小泊に至るの道
12	三吉峠を下りて小泊を望む
13	小泊村を過ること一里許海面を望
14	三吉を下り十丁許りして西望 雨中
15	三よし越を過る道 海岸瀑布
16	小泊脇元に至るの道 七里長浜を望む 四十八丁を以て一里とす 人家絶てなし

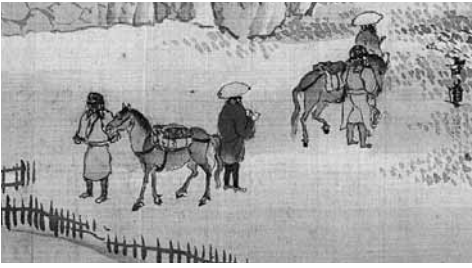
※鬼泊＝現今別町の綱不知辺り ※三吉＝算用子（外ヶ浜町） ※鶴谷＝釣屋浜（むつ市大畑）

※下風呂・蛇浦＝現風間浦村の大字名 ※材木＝大間町奥戸の小字名 ※原田＝佐井村の大字名

本資料が製作された文化4年は、4月に幕府が箱館奉行及び弘前・盛岡両藩に宗谷防衛を指示し、5月にはロシア

1) 青森県立青森商業高等学校 教諭（〒030-0913 青森市東造道一丁目6-1）

2) 青森県立郷土館 学芸主幹（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）



アットウシを着た馬子  
(南部下北半島真景図「9. 蛇浦のほとり  
切通の望」より部分拡大)

船の利尻島への進入に対して奥羽諸藩に蝦夷地出兵を命じるなど、ロシア船の来航に対する北方警備が強化されていく時期である。この資料に描かれた場所のほとんどが津軽海峡に面した下北半島の沿岸部及び現在の今別町から旧小泊村の沿岸部であり、当時の情勢を併せ考えると非常に興味深い。

また、アットウシを着た人物がたびたび描かれている(←写真)ことから、当時の当該地域におけるアイヌ民族との交流を考察する上でも有益な情報を提供する資料である。

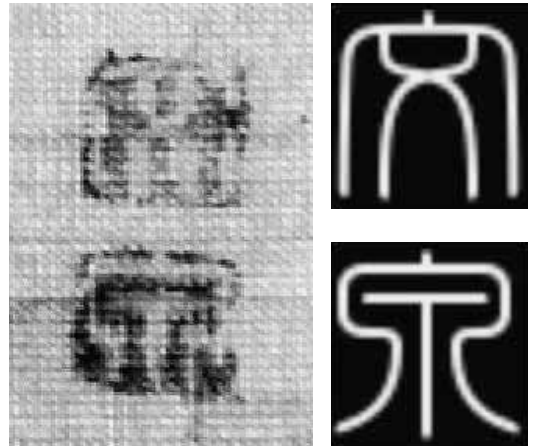
### 3. 大野文泉と『集古十種』

本資料には数か所に印章があり、篆字の印文は「文」「泉」と読める(写真→)。これを手がかりとして調べたところ、谷文晁の門人大野文泉(のち巨野泉祐)が、松平定信の『集古十種』編纂事業に参加し、この種の真景図制作に関わっていたことが判った。

寛政5年(1793)7月、老中首座・将軍補佐職を解かれた松平定信は藩政に専念するため、白河に戻った。その後、兼ねてから関心を寄せていた諸国の古美術情報の集約を思い立ち、多くの学者・家臣・絵師を動員して、木版図集『集古十種』を編纂させた。第1次刊行は寛政12年(1800)で、順次増補され、最終的に全85冊となった。1859点の文物を碑銘・鐘銘・兵器・銅器・楽器・文房・印璽・扁額・肖像・書画の10種に分類し、寸法・所在地・特徴などを記した。添えられた多くの模写図は、谷文晁とその門人及び地方の協力者の手になるものである。彼らは奥州から九州まで全国各地の寺社に赴き、現地で書画や古器物を写しとった。また、現物を取り寄せたり、模本や写本を利用したりした。さらに、多くの優れた風景画(真景図)を残した<sup>3)</sup>。『集古十種』は再刊されており、当館も明治36年(1903)の奥付がある版を所蔵している(成田コレクション・受入番号2196-8-120～140)。青森県の関係では、弘前・長勝寺の嘉元鐘(県重宝、本県で現存最古の銅鐘)が「鐘銘之部」に収録されている。これについては、福田以久生氏が、

『集古十種』の鐘銘が拓本なのか、模写なのかは、その序文あるいは再刊の序からも明らかにし得ない。ものによっては直接写したのもあったであろうし、伝本に拠ったものもあろう。「嘉元鐘」の場合も何れとも断定し難いが、古本から写真版で複製した明治刊行のそれによると、拓本と見ても差支えないように思われる。

と、拓本によった可能性を示唆している<sup>4)</sup>。しかし、「嘉元鐘」が『集古十種』に収録される経緯を明らかにできるような記録は、今のところ見つからない。



ほかに、櫛引八幡宮(現八戸市八幡)所蔵の大鎧(国宝の赤糸威鎧兜大袖付、白糸威褰取鎧兜大袖付ほか)が「甲冑之部」に収録されている。文化3年(1806)、盛岡藩は定信の要請に応じて、筆頭家老の八戸弥六郎家(遠野南部家)が所持する古鎧(重文の紺糸威褰取鎧)や櫛引八幡宮の大鎧の絵図を作成し提供したが、定信はそのできばえに満足できなかったようだ。そのため、翌文化4年に側近の白河藩士田井仲(元陳)を派遣し、これら古鎧を実見させた。その旅行記「婦登古路日記」(東北大学附属図書館蔵狩野文庫)には、元陳が文晁の弟子大野文泉を帯同して櫛引八幡宮を訪れ、調査したとの記事がある。盛岡藩は元陳らの訪問に際し、相当の便宜を図っている<sup>5)</sup>。

現状の「婦登古路日記」に収録されるのは旅の前半部分だけで、後半部分を書き留めたはずの冊は失われてしまっている<sup>6)</sup>。しかし、「婦登古路日

記」の末尾には櫛引八幡宮以降の地名が列記されていて、一行が下北半島から津軽半島を経て日本海側を南下し、秋田・象潟・庄内・山形方面を巡って江戸に帰ったことが判る。同書は、『日本庶民生活史料集成』20（三一書房、1972年）に所収されているので、その部分を摘記し、仮想ルート図を作成した（旧字は新字に改めた）。

是ヨリ後田名部釜臥山ノコト、大畑、安土ノ湊集、千々理浜ノ奇、材木村ノ奇石、異国間ノ落馬、佐井ノ仏カウタ、下風呂ノ名湯、野内ノ関所、津軽外浜、狩場沢ノ転石、三厩ノ巨石、褰月ノ舍利、有戸ノ名石、北海ノ荒波、十三ノ危渡、弘前ノ城郭、夫ヨリ出羽二出、秋田久保田ノ城下、八郎ノ大潟、象潟ノ地震、大師崎ノ嶮難、最上ノ早川、酒田ノ都会、天童ノ長駅、山寺ノ奇景、二口越ノ難所、千人橋ノ陰岨、山形阿古耶松、有耶無耶ノ関、上ノ山ノ温泉、新峠ノ白雪、小坂ノ雪道、阿ふ隈ノ渡、馬子ノ豪夫等ノコトハ別帖ニ継記ス。

#### 4. 「南部下北半島真景図」「津軽外ヶ浜真景図」発見の意義

大野文泉は白河藩士で、梅之丞、万平、安勝と名のつた。文泉は画号である。文化8年に巨野泉祐と改名し、文政6年（1823）に桑名藩へ移った。その経歴を記した『御絵師巨野泉祐 勤功書』（桑名市博物館蔵）には、文泉が文化4年（1807）年8月に奥州・羽州方面の古社寺・古武器と真景の写生を命じられた、とある<sup>7)</sup>。11月には江戸に帰着していることから、上記のようなルートを、かなりのハイペースで通り抜けていったとみることができよう。

「南部下北半島真景図」「津軽外ヶ浜真景図」は、「婦登古路日記」や『御絵師巨野泉祐 勤功書』の情報を補完するものとして、また、文晁派が当地にもたらした様々な影響を考察する上で、注目すべき資料になるとと思われる。

3) 内山淳一：山水癖の繪畫—谷文晁筆「東北地方寫生圖」をめぐって—（『國華』第1355号、2008年）

4) 福田以久生：「嘉元鐘」について（『弘前大学國史研究』70、1980年）

5) 齋藤里香：松平定信による盛岡藩領内の古鎧調査（『岩手県立博物館研究報告』第29号、2012年）

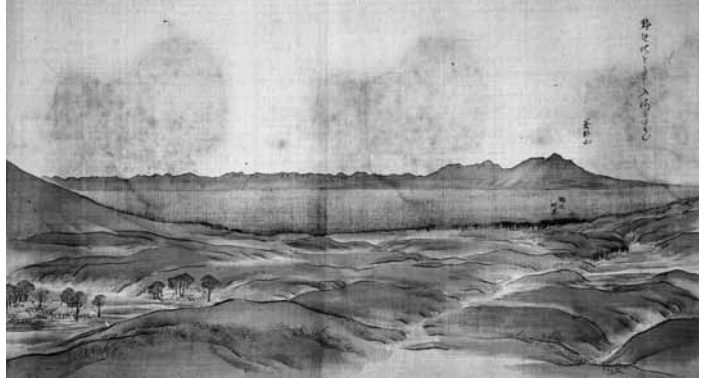
6) 内山淳一：失われたみちのく図巻—谷元旦・大野文泉の東北地方写生図をめぐって—（『仙台市博物館調査研究報告』第29号、2009年）

7) 川延安直：『御絵師巨野泉祐 勤功書』について（『福島県立博物館紀要』第10号、1996年）

南部下北半島真景図



1 野辺地を過て入海をのそむ



2 田名部駅橋上の望



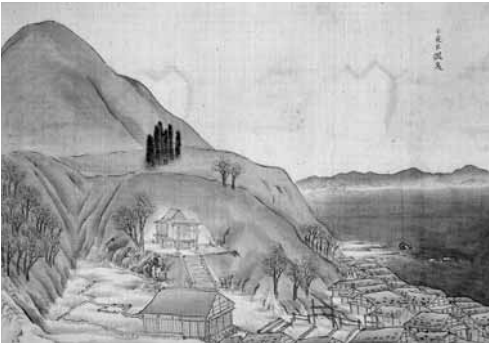
3 鶴谷のほとり間道



4 鶴谷浜の望



5 下風呂温泉



6 異国間より蛇浦に至るの道



7 同所願望



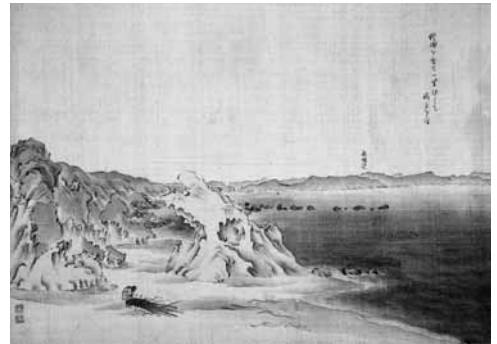
9 蛇浦のほとり 切通の望  
切通 文化四年ひらくといふ



8 南部北郡 蛇浦の望



10 蛇浦を出て一里許して海上を望



11 蛇浦辺北望



12 大間辺



13 大間辺 コウタといふ坂より海上を望



14 材木村の東望



15 材木村



16 原田村を望の図



津軽外ヶ浜真景図

1 外浜鬼泊石門 舍利浜より今別に望むの道



2 今別の東鬼泊より眺望



3 今別南入口よりかえりに見る図



4 今別の西北より三厩を望



5 三厩観音花表のあたりより見る  
三厩駅の辺大石三洞 判官繫馬のところと云



6 三よし越 左右絶壁溪泉を道とす



7 三吉越東望 三厩より小泊江至る



8 三吉越西一里許 湖水辺に至り西海を望



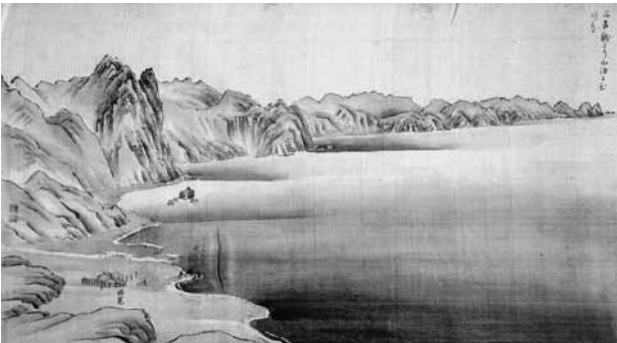
9 三吉越西おり口より竜飛崎を望



10 三吉越を過六七丁にして海を望



11 三吉越より小泊に至の道



12 三吉峠を下りて小泊を望む



13 小泊村を過ること一里許海面を望



14 三吉を下り十丁許りして西望 雨中



15 三よし越を過る道 海岸瀑布



16 小泊脇元に至の道 七里長浜を望む 四十八丁を以て一里とす 人家絶てなし

